



絹本着彩与賀神社縁起図(部分) 永松玄僊 延宝6年(1678年)

# 佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

1 July 1996

No. 113



## 常設特別展

## 明治美術・ニューモード／白馬会の画家たち

会期:平成8年6月29日(土)～9月16日(月)

明治時代、日本近代美術史上あらたな思潮が西洋から流入してきましたが、そのひとつが、明治20年代の黒田清輝、久米桂一郎らの帰国によってもたらされた外光派の画風と、その結果結成された白馬会でした。この白馬会は、明治時代のニューモード（新思潮）として、当時大きな影響力をもちました。

白馬会は1896年（明治29）、鹿児島県出身の黒田清輝、藤島武二、和田英作、佐賀県出身の小代為重、久米桂一郎、岡田三郎助らを中心に結成されました。当時の洋風美術家の団体であった明治美術会からの脱退会員を含め、新進の洋画家たちを集め、明治美術会の旧派（脂派）に対して、新派（紫派）と称され、1910年（明治43）の第13回展まで展覧会を開催しました。

本展は白馬会設立時の鹿児島、佐賀両県の画家たちをはじめ、彼らのフランスにおける師のひとりラファエル・コラン及び白馬会展への出品者で佐賀県ゆかりの画家たちの作品を紹介するものです。

## 出品目録

## ラファエル・コラン（1850～1916）

- |         |            |
|---------|------------|
| 1 令妹の像  | 1890（明治23） |
| 2 日だまり  | 1896（明治29） |
| 3 半裸の婦人 | 年代不詳       |
| 4 婦人像   | 年代不詳       |

## 小代為重（1861～1951）

- |          |            |
|----------|------------|
| 5 シンガポール | 1900（明治33） |
| 6 スエズ運河  | 1900（明治33） |
| 7 婦人像    | 年代不詳       |

## 黒田清輝（1866～1924）

- |          |            |
|----------|------------|
| 8 画室内    | 1889（明治22） |
| 9 風景     | 1892（明治25） |
| 10 小代為重像 | 1897（明治30） |

## 藤島武二（1867～1943）

- |        |                  |
|--------|------------------|
| 11 老人像 | 1908-09(明治41-42) |
| 12 裸婦  | 大正時代             |
| 13 裸婦  | 1920年代           |

## 久米桂一郎（1866～1934）

- |            |            |
|------------|------------|
| 14 泊船      | 1891（明治24） |
| 15 子供のいる風景 | 1895（明治28） |

## 岡田三郎助（1869～1939）

- |           |              |
|-----------|--------------|
| 16 中野次郎助像 | c.1890（明治23） |
| 17 西洋婦人像  | 1900（明治33）   |
| 18 老人像    | 1901（明治34）   |
| 19 若き娘の顔  | 1913（大正2）    |
| 20 花野     | 1917（大正6）    |
| 21 庭      | 1919（大正8）    |

## 和田英作（1874～1959）

- |         |            |
|---------|------------|
| 22 清水海岸 | 1908（明治41） |
| 23 富士山  | 1912（明治45） |

## 中沢弘光（1874～1964）

- |         |      |
|---------|------|
| 24 奈良風景 | 年代不詳 |
|---------|------|

## 高木背水（1877～1943）

- |         |            |
|---------|------------|
| 25 緑蔭   | 1911（明治44） |
| 26 英国風景 | 1911（明治44） |

## 山口亮一（1880～1967）

- |       |            |
|-------|------------|
| 27 風景 | 1909（明治42） |
|-------|------------|

## 青木繁（1882～1911）

- |       |            |
|-------|------------|
| 28 朝日 | 1910（明治43） |
|-------|------------|

## 北島浅一（1887～1948）

- |         |             |
|---------|-------------|
| 29 海辺の村 | c.1916（大正5） |
|---------|-------------|

## 御厨純一（1887～1948）

- |       |           |
|-------|-----------|
| 30 木蔭 | 1913（大正2） |
|-------|-----------|

作品番号 1, 3, 4, 9, 22, 23は鹿児島市立美術館所蔵です。

## 作家解説

ラファエル・コラン Louis-Joseph-Raphaël Collin  
1850～1916

パリに生まれる。ブーグローとカバネルのアトリエで画家としての伝統的教育を受けた。カバネルのアトリエで中学時代の仲間バステアン・ルバージュに再会。1873年サロンに初入選、二等賞牌を受賞。以後サロンに出品する。アカデミックな折衷的作風により評価を得る。1889年パリ万国博覧会で大賞受賞。ソルボンヌ大学の職、オデオン座の天井画さらにオペラ・コミック座を手がける。1890年以降小説の挿絵も描く。1902年エコール・デ・ボザールの教授、1909年学士院会員に任じられる。日本近代洋画史上、黒田清輝、久米桂一郎、岡田三郎助らの師として知られる。

**小代为重** SYODAI Tameshige 1861(文久元)～1951(昭和26)

佐賀城下に生まれる。旧姓中野。明治8年上京、慶応義塾幼稚舎に入るが、本科を中退し工部省修技校に学ぶ。同16年小代家の養子に入る。同年千葉師範学校助教員となり、この頃百武兼行に油絵の指導を受けたとされる。同19年工科大学卒となり工部大学の造家学教室で曾山幸彦と建築装飾を講じる。同22年明治美術会創立に会員として参加。同29年退会し、同年の白馬会創立に参加する。同33年パリ万博事務員として渡仏。帰国後青山学院で教鞭をとる。

**黒田清輝** KURODA Seiki 1860(慶応2)～1924(大正13)

鹿児島城下に生まれる。明治5年上京。同17年法律研究のため渡仏。翌年藤雅三を知り、ラファエル・コランに接し、やがて西洋修業を決意する。同19年コランに入門。この年久米桂一郎を知る。同26年帰国。翌年天真道場設立。同29年白馬会を結成する。同年東京美術学校西洋画科の授業を依頼される(31年教授)。同40年の文展開設以来官展の審査員をつとめ、洋画界の中心を占めるに至る。同43年帝室技芸員となる。大正2年国民美術協会会長に就任。同9年貴族院議員、同11年帝国美術院長となる。

**藤島武二** FUJISHIMA Takeji 1867(慶応3)～1943(昭和18)

鹿児島城下に生まれる。鹿児島中学時代在学中、西条源の平山東岳に日本画の手ほどきを受ける。明治18年上京し、川端玉章に入門する。同20年東洋絵画共進会、同22年青年絵画共進会で受賞。同23年、同郷の曾山幸彦の画塾に入り初志の洋画研究に専念する。翌年山本芳華の生巧館画学校へ移る。同29年東京美術学校西洋画科助教に就任。また白馬会に参加する。同39年から4年間パリ、ローマに留学。大正13年帝国美術院会員。昭和9年帝室技芸員。同12年文化勲章を受章する。

**久米桂一郎** KUME Keiichirō 1866(慶応2)～1934(昭和9)

佐賀城下に生まれる。明治7年上京、同14年第2回内閣勸業博覧会出品のコンテ商を見て西洋美術を志し、同17年から藤雅三に師事する。同19年渡仏、ラファエル・コランに入門。この頃黒田清輝を知る。同26年帰国、黒田とともに天真道場の開設から白馬会創立と画壇に新風を吹き込む。同31年東京美術学校教授に就任。その後は制作発表からは遠ざかり、専ら美術教育、行政、啓蒙活動等に尽力する。大正11年から昭和6年まで帝国美術院幹事をつとめる。

**岡田三郎助** OKADA Saburōsuke 1869(明治2)～1930(昭和14)

佐賀城下に生まれる。旧姓石尾。幼時に上京。旧藩主鍋島直大邸で百武兼行の油絵に接し、洋画への関心を示す。明治20年小代重の紹介で曾山幸彦の画塾に入る。同27年黒田、久米が指導する天真道場へ入門。同29年白馬会創立に加わる。また同年新設の東京美術学校西洋画科の助教に就任となる。翌30年渡仏、ラファエル・コランに師事する。帰国後は美術教授に就任。官展の中心画家として活躍する。大正8年帝国美術院会員、昭和9年帝室技芸員となり、同12年第1回文化勲章を藤島武二らと受賞する。

**和田英作** WADA Eisaku 1874(明治7)～1959(昭和34)

鹿児島県肝付郡藤水村に生まれる。幼少時に上京、明治20年明治学院に入学。三宅克己らに洋画の手ほどきを受ける。曾山の画塾から原田直次郎の画塾へ転じ、明治美術会展に出品する。同27年天真道場へ入門。同29年白馬会創立に加わる。同30年東京美術学校西洋画科助教を辞し、同科第4年級に編入。卒業制作は「渡頭夕暮」。同32年渡欧、ラファエル・コランに師事する。同36年帰国、美術教授となる。第1回文展から審査委員をつとめ、文展、帝展の中心作家として活躍する。大正8年

帝国美術院会員、昭和9年帝室技芸員に任じられ、同18年文化勲章を受章する。

**中沢弘光** NAKAZAWA Hiromitsu 1874(明治7)～1964(昭和39)

日向佐土原藩士の長男として東京芝に生まれる。同20年曾山幸彦の画塾に入り、曾山没後と同塾を継いだ堀江正章に師事する。同29年東京美術学校西洋画科に入学、黒田の指導を受ける。また同年創立の白馬会に参加、以後展覧に出品する。この頃高木青水と写生旅行する。大正11日より1年間西欧を遊学。文展、帝展、日展に出品を続け、昭和5年帝国美術院会員、同19年帝室技芸員となる。また、明治45年光風会、大正2年日本美術商會、昭和13年白日を精成し、画壇の長老として重きをなした。同32年度文化功労者。

**高木青水** TAKAGI Haisu 1877(明治10)～1943(昭和18)

佐賀市に生まれる。本名誠一郎。義兄に広津柳菴。明治22年上京、同26年ごろ岡田三郎助を知り、翌年大幸館画塾に入り堀江正章らの指導を受け、のち白馬会洋画研究所に通う。同36年ベルツ博士の講義所に同行。同37年渡米(同39年帰国)。同43年渡英する。滬英中ロイヤル・アカデミーにも出品した。大正4年「明治天皇像」を制作。同年から同8年まで朝鮮に滞在し、同9年再渡欧する。その後朝鮮美術展設立に尽力し、帝展ほか光風会展、白日会展にも出品する。

**山口亮一** YAMAGUCHI Ryōichi 1880(明治13)～1967(昭和42)

佐賀市に生まれる。6歳のとき市与賢町の医師小口口雄の養子となる。佐賀中学校、早稲田中学校から明治39年東京美術学校西洋画科に入学。同43年第4回文展に初入展。以後展覧に出品する。翌年美校を卒業後、帰郷する。大正2年岡田三郎助らの指導を受けて佐賀美術協会を創設。同10年佐賀師範学校に勤務。同13年与賢に佐賀洋画研究所を設立。昭和21年佐賀美術工芸研究所を開設。同37年佐賀県知事より文化功労者として表彰される。

**青木繁** AOKI Shigeru 1882(明治15)～1911(明治44)

久米村に生まれる。明治28年久米米中学美術科に入学。この頃森三美につき洋画を習う。同32年上京、小山正太郎の不同舎に入門する。翌年東京美術学校西洋画科に入学。同36年第8回白馬会展で第1回白馬会賞を受賞する。翌37年美校卒業。夏、房州布良に遊び「海の幸」を制作する。このころ蒲原有明と交遊する。同40年帰郷。翌年家を出て、天草、佐賀(佐賀市、小城市、唐津、古津)を放浪する。

**北島浅一** KITAJIMA Asachi 1887(明治20)～1948(昭和23)

小城市牛津町に生まれる。小城中学校を卒業後、明治40年東京美術学校西洋画科に入学。同級に御厨純一、萬歳五郎らがあった。同45年卒業。同年第1回光風会展に3点出品。大正2年第7回文展に初入展する。同8年に渡仏、アカデミー・コロッセに学ぶ。同10年サロン・ドートンストンに入選。翌年帰国する。同13年白日会に参加。この頃濱谷四郎の家で隠れに住む。同14年第6回帝展で特選受賞。昭和4年第1美術協会創立に参加する。

**御厨純一** MIKURUYA Junichi 1887(明治20)～1948(昭和23)

佐賀市高木町に生まれる。明治39年佐賀中学校を卒業。翌40年東京美術学校西洋画科に入学。同級に北島浅一がいた。同45年同校を卒業。卒業制作が美校に買上げられる。大正15年渡欧、パリでサロン・ドートンストン、サロン・ナショナルに出品した。昭和3年帰国。翌4年青山熊谷、片多徳郎らと第一美術協会を創立する。同12年海軍省の委嘱により海洋美術協会となり、その後は海軍従軍画家として多数の戦争画を発表する。

(企画普及係長 松本誠一)

常設特別展

描かれた佐賀の祭礼—先導のかたち—

会期:平成8年6月29日(土)～7月28日(日)

佐賀県内には、200を越える民俗芸能が伝承されていて、その多くは「浮立」と呼ばれてきました。まさに浮き立つような笛・鼈・太鼓の音色は、春の田植えと秋の収穫を告げ、四季のリズムをかたちづくってきました。

このような多くの浮立の中には、特に「露払い」の団を持つものがあります。神幸行列の獅子、鉦先に取り付けられた鼻の高い天狗面、それに面浮立の「道行き」でスリザサラを鳴らしながら歩く鬼、いずれも行列の先頭を歩き、これから行くべき道を払い清める役割を持っています。

今回は、「浮立」の構成の中でも特に特徴的な先導の団に注目し、それか描かれた祭礼絵図を中心に、先導役の仮面や衣装、道具なども展示し、佐賀県内における地域的な特色や、年代による形態の変化などを紹介します。

展示構成

- I 先導のかたち—獅子—
- II 先導のかたち—天狗—
- III 先導のかたち—鬼—

I 先導のかたち—獅子—

佐賀県内で獅子が登場する芸能と言えば、西南部で見られる「獅子浮立」と、県内各地で見られる「獅子舞」があります。前者は、一つの獅子頭を一人かかぶり、太太鼓を中心に、双方から二人で太鼓をたたきながら踊る形式のもので、「浮立系の獅子舞」と呼ばれています。一方、後者は、一つの獅子頭からさがっている布の胴に、二人、または数人がはいて舞い、神幸行列の際、御輿の先方を行き、「露払い」の役割をはたすもので、「伎楽系の獅子舞」と呼ばれています。(唐津市神田のカブカブ獅子は一人立ち形式のもので伎楽系の獅子舞ではない)

そもそも、この「伎楽系の獅子舞」とは、7世紀の初めに百済(朝鮮半島)から日本に伝えられた伎楽に登場する獅子(二人立ちの獅子と、それをあやつる役で一つの構成をとる)と共通する要

素を持つことからそう呼ばれていて、佐賀県内では、東部・中部・西南部の各地域でそれぞれに特徴のある獅子頭や獅子舞が伝承されています。(写真1～4)

\* 伎楽風の供養を目的に演じられた、楽器演奏をともなう舞言の仮面劇



1 獅子舞 鳥栖市 四阿屋神社



2 獅子舞 神埼町 榎田神社



3 獅子舞 諸富町 新北神社



4 獅子舞 塩田町 八幡神社

## II 先導のかたち—天狗—

神幸行列の際、御輿の先方を行き、「露払い」の役割をはたすもの一つに鼻の高い面（通称、天狗面と呼ぶ）があります。この様子を描いた最も古いものに「年中行事絵巻」（平安時代末期頃）がありますが、この頃の面は、現在のように鉾先に取り付ける形式のものではなく、直接人がかぶり、鉾は手に持っている形式であったことがうかがえます。「与賀神社縁起図」（延宝6年・1678年・表紙）にもその様子が描かれ、少なくとも江戸時代の初め頃まではそうした習俗であったことがわかります。

一方、鼻高面の在銘品として日本で最も古いものは田島神社（佐賀県呼子町加部島）のそれ（正安2年・1300年・写真6）で、次いで県内では新北神社（佐賀郡諸富町）の元亀3年（1572年）銘のもの（写真7）が知られています。現在、よく神幸行列の先頭で見かける天狗面と比較してみると、時代を追うことにしだいに顔の表情や鼻が誇張されていく様子がうかがえます。



6 鼻高面 正安2年 1300年



7 元亀3年 1572年

## III 先導のかたち—鬼—

鹿島市を中心に佐賀県西南部に伝承されている面浮立は、鬼面をつけて群舞することで知られ、佐賀県を代表する民俗芸能の一つです。特に、「道行き」の先頭でスリザサラを鳴らしながら歩く鬼（面）を先面、あるいはササラ面（写真8）などと呼び、「露払い」の役割を持つものとして、他の鬼と区別しています。

武雄市の富岡天満宮に奉納された「面浮立絵馬」（明治時代中期・武雄市教育委員会所蔵）には、行列の先頭にササラ面をかぶった人物が2名描かれ、左手には茶笥状の「ささら」を、右手にはT字形の「ささらご」を持っています（写真9）。この「ささら」と「ささらご」を擦り合わせることで音をだすようになっているスリザサラは、面浮立の他、舞浮立や天衝舞浮立にも使用されますが、「露払い」の意味はなく、あくまでも囃子道具の一つとして利用されていることに注意しなければなりません。

(学芸員 山崎和文)



8 ササラ面 芦刈町



9 面浮立絵馬（部分・明治時代中期）佐賀県重要有形民俗文化財

## 常設特別展

## 鍋島 閑叟の築いた佐賀

会期：平成8年8月3日(土)～9月16日(月)

江戸時代の終わり、第10代佐賀藩主となった鍋島直正(閑叟)は、窮乏した藩財政を建て直し、激動する時代に対応していくため、大規模な藩政改革を実施しました。

なかでも大きな功績は、最新の洋学研究を奨励し、医学や化学、特に軍事科学の研究・技術開発を行ったことでした。直正が佐賀城下の築地と多布施に設けた日本初の反射炉では、戊辰戦争で使われたアームストロング砲に代表される鉄製の大砲が多く製造されました。また、藩校弘道館を拡充し、英学校致遠館を創設するなど教育制度も改革して、大隈重信・副島種臣ら、幕末維新期の歴史に名を残すたくさんの方の有能な人材を世に送り出しました。

本展では、幕末の佐賀にあつて広く世界に目を向け、近代日本の礎となる多くの人材を育てた鍋島直正の事績を紹介します。

## I 西洋文明との出会い

文化5年(1808)イギリスの軍艦フェートン号が長崎港に侵入しました。長崎警備を担当していた佐賀藩は、幕府から厳しい叱責を受け、防備をより一層強化する必要に迫られました。天保元年(1830)に藩主となった直正は、洋学、特に蘭学を積極的に取り入れ、藩政の改革と長崎警備の強化に力を注ぎました。



フェートン号絵図(長崎市立博物館蔵)

## II 近代科学技術の導入

当時の佐賀藩の洋学研究は軍事技術の研究開発が中心でした。長崎警備で必要な鉄製大砲を製造



鍋島直正肖像(鍋島報効会蔵)

するためにはまず材料の鉄を大量に溶解する反射炉をつくらなければなりませんでしたが、新たに設置された精煉方(理化学研究所)の技術者たちが総力を結集してこの困難な事業を推進しました。反射炉築造と鉄製大砲製造が佐賀における洋式機械工業導入の端緒となりました。

## III 西南雄藩への道

長崎で始まったオランダ海軍の技術伝習には、佐賀藩からも48名が派遣されました。佐賀藩では、伝習生に操船や造船の技術を習得させると同時に、三重津に海軍所を置いて独自に蒸気船の建造を始めるなど海軍力の増強をはかりました。諸藩に比べ強大な軍事力をもった佐賀藩は、幕末維新期に「薩長土肥」と並び称される雄藩になりました。

(学芸員 本多美穂)



長崎海軍伝習所絵図(鍋島報効会蔵)

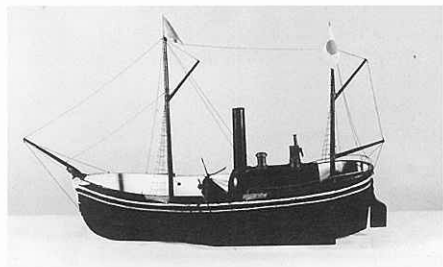
〈主な展示資料から〉



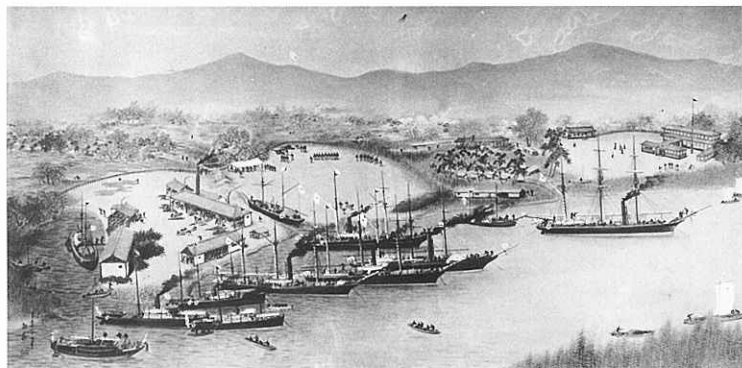
鍋島直正二行書 安政3年(1856) 館蔵  
「先天下之憂而憂 後天下之樂而樂」とある。



佐賀藩精煉方絵図(部分) 陣内松齡筆 鍋島報効会蔵  
多布施に設けられた精煉方での高気車(模型)の運転の様子が描かれている。



佐賀藩製造蒸気船雛型(外輪船) 鍋島報効会蔵  
精煉方で造られた蒸気船の模型。



三重津海軍所之図 鍋島報効会蔵  
三重津(佐賀郡川副町)に設けられた佐賀藩の海軍基地の様子。

## 行事案内

4月⇨6月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	③	④		
⑤	⑥	⑦	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	③	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

カレンダー内は、□印は休館日

常 設 展				展 覧 会			
観覧料大人200(150) 大学150(100) ※高校生以下は無料、( )内20名以上団体				枠内に明記する以外は無料			
博 物 館		美 術 館		博 物 館		美 術 館	
1号展	2号展	3号展	大 展	1号A展	2号展	3号展	4号展
第27回 日 展 佐賀会場 3/29(金)~4/21(日) 西日本新聞社 大人1000(800) 大高生600(400) 中小生400(300) ※( )内は前売・団体料金							
4/26	常設展 佐賀県の歴史と文化 および 平成7年度新収蔵品展	(展 示 準 備 の た め 休 室)	4/26	4/26	中島深の世界展 4/26(金)~5/6(月) 電気新聞社 大人・大学生700(500) 高中小生400(300) ※( )内は前売・団体料金	A I S 展 N 1996 5/1(水)~5/6(月) フルーツUS	
5/19			第80回 二 科 展 5/10(金)~5/26(日) 佐賀新聞社 大人800(700) 大高生500(400) 中小生300(200) ※( )内は前売・団体料金				
5/23			第4回 梧竹・蒼海園彫佐賀県書道展 (前期)5/30(木)~6/2(日) 佐賀新聞社 (後期)6/5(水)~6/7(金)				
6/23	常設展 佐賀県の歴史と文化 および 平成7年度新収蔵品展	9/16	7/7	6/29 (常設特別展) 「明治美術・ニッポン」 「白鳥の恋」 9/16	6/29 (常設特別展) 「懐かれた佐賀の祭り」 7/28	第24回 大空書道展 6/25(火)~6/30(日) 佐賀県書道教育連盟	

## 人事異動

4月1日付人事異動で下記のとおり職員の異動がありました。

## 転 入

総務課 主 査	園田正伸 (佐賀中部農林事務所主査より)
学芸課 主 事	本多美穂 (名護屋城博物館主事より)
学芸課 主 事	野中耕介 (芦刈中学校教諭より)

## 転 出

総務課 主 査	小林静枝 (退職)
総務課 主 査	事務員(守) 坂井卓次 (退職) 兼・技術員(運)
学芸課 主 査	川副義敦 (神埼清明高校教諭へ)
学芸課 主 査	福井尚寿 (文化財課主査へ)

佐賀県立博物館・美術館報 第113号 平成8年7月1日  
 編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館  
 〒840 佐賀市内1-15-23 TEL.0952・24・3947 FAX.0952・25・7006  
 印刷 日之出印刷株式会社